

名古屋大学腫瘍外科での国内外科研修を終えて

新東京病院外科

星川真有美

2018年7月、猛暑が続く名古屋。降り立った東海道新幹線のホームは、連休最終日の海の日を楽しむ人々でとても混雑していました。

日本臨床外科学会による平成30年度国内外科研修プログラムとして、名古屋大学腫瘍外科で研修(2018年7月17日～27日)させていただきました。短期間ながら大変印象深い2週間となり、このような機会を与えてくださいました日本臨床外科学会 跡見裕会長、国内外科研修委員会 高山忠利委員長を始めとする委員の先生方、そしてお忙しい中ご指導くださいました名古屋大学腫瘍外科 柳野正人教授を始めとした教官、医員、秘書の皆様がこの場をお借りして御礼申し上げます。

私は初期臨床研修終了後、静岡県での外科後期研修中に肝胆膵外科を志し、その後約6年間の大学病院勤務で肝胆膵外科への興味を深めて参りました。特に手術について、ある程度の症例経験を経た現在、各施設、各先生方の技術やこだわり等をぜひ知りたい、視野を上げたいと思い、本研修を希望しました。

名古屋大学腫瘍外科は、肝胆膵外科領域では誰もが知る肝門部領域胆管癌の総本山であり、私の研修中2週間だけで、拡大右肝切除2例、拡大左肝切除+右肝動脈合併切除再建、左三区域切除を伴うHPD、膵癌に対する膵体尾部切除といった多彩な手術を見学するだけでなく、後半は術野に参加させていただくことも出来ました。的確な手術手技はもちろんのこと、胆管をどこで切離するかを意識した動脈末梢の剥離の場面では、術者の先生方それぞれが解剖学的なこだわりを口にされるのがとても印象的で、肝門部胆管癌手術への造詣の深さを改めて、今の私なりに実感致しました。また、肝胆膵外科は消化器内科、放射線科と強い連携が必要な領域でもあり、ERCP、TACE、PTPEも見学させていただきました。手術を意識した胆管造影とthin sliceのdynamic CTは外科症例検討会でも非常にphotogenicでしたし、内科と外科とで十分に議論して決めたドレナージすべき胆管については、例え4本でもENBDを挿入し、それを受け入れて手術を待つ患者さんも、病棟で支えるスタッフの皆様も、本当に強い気持ちを持っているのだと、手術室以外でもまた感銘を受けました。そして、この臨床を支える医員の先生方とは同世代であり、手術および周術期管理に対する綿密な準備と熱意、時には少し悩んだり困ったりする点も、等身大かつ共感できる点が多かったことも、本研修の私の一収穫です。

手術の流儀、ドレーンの種類、入れ方、術後管理、病棟回診と、どの場面でも、これまで見知って来たことと一つずつ比べては、毎日わくわくしながら研修を過ごしました。切除標本の検討はこれまでほとんど病理医任せでしたが、名古屋大学ではホルマリン固定から自ら割を入れ、主腫瘍の占拠部位、進展様式の評価に加えて胆管4次分枝まで同定するなど切除標本の情報と術前情報との詳細な比較検討を全症例に行っており、その熱意とこだわりは、詳細な解剖の把握と的確な技術、緻密な周術期管理を要する肝門部領域胆管癌の手術にまさに直結するものだと思います。

ほんの2週間だけでも、この紙面だけでは書ききれないくらい、感じたことがたくさんありましたので、これからもこの国内外科研修制度が、多くの先生方の刺激と研鑽の契機となることを願っております。

最後に、このプログラムに推薦して下さいました山本順司先生、また、2週間の不在をお許し頂いた当科先生方、本当にありがとうございました。今回の研修で得た鮮やかな見聞を持ち帰り、今日からも一症例一症例、大切に向き合っていくと思える研修となりました。